

月日等を記載してある。

ジヨヨウ 怒陽 ↓コウザンジヨヨウ 廣山怒陽。

ジヨリユウ 如柳 ↓タチヤジヨリユウ 館屋如柳。

シヨリユウヘイロン 諸流兵論 一冊。劍術の諸流に就いて論辨した書で、享保四年六月八島半蔵爲次がその門人熊谷忠右衛門に與へたものである。

ジヨロウイシ 女郎石 羽咋郡千浦に在る陰石をいふ。高さ三米五、廻り八米。

ジヨロウダキ 女郎瀧 江沼郡九谷の東南山中にあり、高さ一〇米。下流千東瀧となり、遂に大聖寺川に入る。その形容の艶麗なるが故に名付けるといふ。

ジヨロウダキ 女郎瀧 河北郡正部谷の東に在る。直下二七米、幅三〇樞だが水量を増す時は一米餘となる。

ジヨロウバカ 女郎墓 能美郡串茶屋の東北郊外に、同村の遊女を葬つた墓地があつて、地方人はそれを女郎墓と言つて居る。現に存するもの十五基、寶曆に初つて萬延に終り、概ね戒名・俗名・忌辰を記し、或はその年齢と紋所とを刻してある。

シライシ 白石 ↓シラセ 白瀧。シライシシヨウクロウ 白石庄九郎 又莊九郎に作る。諱は重秋。羽咋郡白瀧の人。關流の算學を越中の石黒信由に學び、その文化十年三月掲げた算學の奉額は、もと同郡氣多神社に在つた。

シライトダキ 白絲瀧 鹿島郡能登部下の宮川谷内に在つて、水細く銀絲を懸ける如くであり、一に懸絲瀧とも稱する。溪流に山椒

魚を産する。

シラウヲ 白魚 加賀志微にいふ。寶曆十三年の加賀物産調帳に、『白魚、大野村』と載せ、加賀物産志に『鱸、白魚或は大野ゴリといふ。七月より三月取る。』とある。この白魚は河北瀧に産し、今いふ索鱈で、食物本草の銀魚に當る。白魚は松雲公夜話に、中村刑部が江戸品川から持來つて放養したに初るとし、『陽春院様御廣式に而刑部咄申。』とあるが、陽春院は利常第六女で、刑部の死後に生まれたのであるから、陽春院即ち前田光高の誤であらうとある。しかしあの魚を活送し得たとは思はれぬ。原産であらう。

シラエ 白江 能美郡輕海郷に屬する部落、源平盛衰記壽永二年五月二日の條に、『源氏は篠原に城郭を構て有けれども、大勢打向ければ堪ずして、佐見・白江・成合池打過つて、安宅渡住吉濱に引退つて陣を取。』とあるのは、序次を失つて居る。又こゝには白江景平が居たともいふが、堡迹も館迹も存せぬ。

シラエウチ 白江氏 尊卑分脈に、板津成景の子白江新介景平、その嫡子同新介景盛、二男同三郎景家、三男同四郎光景、四男同六郎忠景、景盛の子同彌二郎景範、二男同四郎景重とある。能美郡名蹟誌に、白江新介景平とその子景盛は、本郡白江村に居住したのであるとする。

シラエシヨウ 白江庄 能美郡に在つた。室町殿日記に、『加賀國白江庄の領主跡目に附て、長慶方へ度々理りを申ければ、筑前守三好以書狀御所へ申上らるゝ云々。』と見える。これは永祿四年比のことで、當時まで西郡某の知行所であつたのを、翌五年には幕府の料

所とした文書がある。

シラエナリツグ 白江成瀧 通稱金十郎。天明六年父多太夫成典の遺知百六十六石三斗九升を襲ぎ、御馬廻に班し、改作奉行・割場奉行より次第に昇進して、文政三年祿百石を加へ、遂に新番頭に至り、六年致仕して休悦と號し、二十人扶持を受けた。

シラエリンエツ 白江林悦 初め豊臣秀吉及び京極丹後守に仕へたが、後前田利常の臣となつて二百石を受けた。子孫相繼いで藩に仕へる。

シラカタ 白方 珠洲郡粟津の内の小字。地圖に白形に作るものがある。

シラコウラ 白子浦 羽咋郡粟生の領で、末森城の西北二軒餘に在る。その砂丘を白子山といひ、近郷の者毎年そこで角力を催す。

シラサキ 白崎 鳳至郡大川の部落西方の岬。

シラサキケンシン 白崎玄眞 初名玄水。文化七年御醫者として召出され、十人扶持を受けた。子孫玄令・玄章相繼ぐ。

シラタキ 白瀧 能美郡新保地内で、部落から西南八軒の平谷にある瀑布。高さ五五米。

シラタキ 白瀧 能美郡丸山にあるが故に、丸山白瀧ともいふ。部落から東へ九〇〇米、杖往來の傍にある。高さ二七米。

シラタマ 眞珠 萬葉集第十八卷に、大伴家持が詠じた『爲贈京家一願眞珠』歌。珠洲之安麻能、於伎都未可美爾、伊和多利豆、可都伎等流登伊布、安波妣多麻、云々。』がある。是より先天平廿一年家持は能登を巡行したが、その三月には既に越中射水の國府に歸り、四月十四日天平感寶と改元せられ、五月十四日その曾て能登に在つた時、海人の眞珠を得ることを知つてゐたから、若しそれを在京の夫人に贈らば如何に満足を買ひ得べきかを想像して之を作つたのである。この眞珠は阿古屋貝の中に産するものではなく、歌に詠じた通り眞珠である。

シラトリ 白鳥 鹿島郡庵の内の小字。

シラトリジンジャ 白鳥神社 河北郡津幡の内加賀爪に鎮座する。三代實錄貞觀十八年七月廿一日白鳥神の神位を進めて從五位下を授け給うたと見える。式内等舊社記には、『白鳥神社。國史記載社也。井上庄加賀爪村鎮座。稱白鳥明神。祭神日本武尊。』とあり、里俗に入幡宮とも加賀爪社ともいふた。

シラネグサ 白根草 一冊。金澤の俳人琴著。延寶八年山森六兵衛板。著者の父母に對する追善の句七十章を集め、孤峰山黃鸞の序を附する。卷末に交名が附けられ、その句數千四十餘とあるから、これはその拔萃であらう。

シラネシユウ 白根集 一冊。金澤の俳人黃年編。嘉永三年金澤集雅堂石立屋文二板。加能越三國の俳人の句を集め、卷末に附合もある。書名に就いては『講式の盟約を堅く

るしき藥師あり。』と見え、この藥師を白瀧藥師と稱する。

シラタマ 眞珠 萬葉集第十八卷に、大伴家持が詠じた『爲贈京家一願眞珠』歌。珠洲之安麻能、於伎都未可美爾、伊和多利豆、可都伎等流登伊布、安波妣多麻、云々。』がある。是より先天平廿一年家持は能登を巡行したが、その三月には既に越中射水の國府に歸り、四月十四日天平感寶と改元せられ、五月十四日その曾て能登に在つた時、海人の眞珠を得ることを知つてゐたから、若しそれを在京の夫人に贈らば如何に満足を買ひ得べきかを想像して之を作つたのである。この眞珠は阿古屋貝の中に産するものではなく、歌に詠じた通り眞珠である。

シラネシユウ 白根集 一冊。金澤の俳人黃年編。嘉永三年金澤集雅堂石立屋文二板。加能越三國の俳人の句を集め、卷末に附合もある。書名に就いては『講式の盟約を堅く

るしき藥師あり。』と見え、この藥師を白瀧藥師と稱する。